

秦 嘉 と 徐 淑

——物語と五言詩——

森 田 浩 一

『玉台新詠』（巻一）に、一組の夫婦が互いに贈った詩が載せられている。時は後漢、夫の名を秦嘉といい、妻の名を徐淑という¹⁾。今となつては話題に上る事も少ないふたりだが、現在でも人の注意を引くことがあるとすれば、それは、この贈答詩に関わる次の二点によってであろう。

まず第一点は、その詩が文学史の上で突出した存在である点である。とはいえ、その作品の質について言うのではない。その突出性とは、後漢という早い時期にあつて、一組の夫婦が自ら五言詩を製作して互いに贈りあつたという点である。すでに鈴木修次氏が指摘されているように、建安以前の漢代の詩においては、贈答詩という形式の作品にとほしく²⁾、また、そもそも五言詩自体が少なかった。

第二点は、妻の徐淑が、女性の倫理的手本として取り上げられることがあつたことである。この場合、夫の秦嘉は脇役にすぎない。近人嚴可均は、このような存在としての徐淑に改めて注意を向け、「徐淑伝」を著したのであつた³⁾。

さて、本論のかれらに注意する所以は、五言詩と物語の関係についての興味からである。このことは、小南一郎氏の、漢代五言詩が文芸として発生したころ、この詩形の作品はしばしば物語の中に挿入されていたものが、その物語から分離して独立の作品とされた場合があるだろうという説にヒントを得ている⁴⁾。

数少ない古代の女性作家として、徐淑という女性に現今の女性文学史が注目するまでは、文学史上注意を向けられることもなく、また、倫理的な存在

としても決して大きく取り上げられてきたわけでもない。徐淑とその夫秦嘉のふたりが今にその名を伝えることができたのは、まさに、ふたりの詩が『玉台新詠』に、書信が『芸文類聚』などに記録されたことによるのだが、そういった書物の中に定着するまでの間、秦嘉と徐淑の作品が、いかに人々のなかで伝承されていたのであろうかということに思い至るとき、そこにはかれらふたりについての物語が生き生きと伝承されていた場があったろうことが想像される。

かれらに関して、今日目にすることができる資料は、まことに少ないと言わざるを得ない。それゆえ、あるいは相当乱暴な推測と思われる箇所もあるかと思われるが、かれらの詩を通して、詩と物語の関係の一端を探ってみることとしよう。

—

『玉台新詠』がかれらの作品につけている序文から見てみよう。

「秦嘉、字士會、隴西人也、爲郡上掾。其妻徐淑、寢疾還家、不獲面別、贈詩云爾」。秦嘉は、字は士会、隴西の人である。郡の上掾となった。かれの妻の徐淑は病気で実家に帰っており、そのため、会って別れを告げることができず、詩を贈ることとなった。

秦嘉が郡の上掾となったことが記されているが、紀容舒（『玉台新詠考異』）も指摘するように、上掾は上計の誤りである⁵⁾。（後述するように『詩品』は「上計」に作る。）当時、地方から中央への人材登用の道筋には、上計掾もしくは計偕と呼ばれる制度があって、その制度に与って都へ上ったものが、後に中央で郎に任命されることがあった。なお、『隋書』経籍志（以下、『隋志』と略記）に、梁の時に、「後漢黃門郎秦嘉妻徐淑集一卷」があったことを著録しているが、ここから、秦嘉が上計に選ばれて後、黄門郎に就いたとされていたことが知られる。

紀容舒は、この序文を信じるに足るものではないとする。李陵と蘇武の贈

答詩同様、仮託された作品である、という判断である。

とはいえ、序文の内容自体がまったく信用するに足らないというわけではない。この序文が生まれてきた背景を物語る資料は他にも存在しているのである。

たとえば、鈴木虎雄博士は、かつてその『玉台新詠』訳注書（岩波文庫）において、読者が秦嘉と徐淑の贈答詩が生まれた背景を理解する便として、かれらが取り交わしたものとされる書信を掲げた。詩を読む前に少し回り道になるが、ここでその書信をひととおりに眺めておくこととしよう。

なお、書信は『芸文類聚』（巻32）に収められている他、『北堂書鈔』や『太平御覧』にも断片が収められている。この断片と『芸文類聚』の書信との関係は明らかにしがたいが、巖可均は、その「徐淑伝」において、断片を『芸文類聚』の書信の中に融合し、その再構成を試みている。かれの書信の再構成は、非常に巧みなものであるが、今は取りあえず『芸文類聚』によることとする。

まず、秦嘉から徐淑への第一信である。

「不能養志。當給郡使。隨俗順時、僂俛當去。知所苦故爾、未有瘳損、想念悒悒、勞心無已。當涉遠路、趨走風塵、非志所慕、慘慘少樂。又計往還、將彌時節。念發同怨、意有遲遲。欲暫相見。有所屬託。今遣車往、想必自力」。志を養う能わず。当に郡吏に給すべし。俗に随い時に順い、僂俛して当に去るべし。苦しむ所故より爾うして、未だ瘳損すること有らざるを知らば、想念悒悒たりて、勞心已むこと無し。遠路を涉り、風塵に趨走するに当たりて、志の慕う所に非ざれば、慘慘として楽しみ少なし。又た往還を計るに、將に時節に彌らんとす。発つを念えば怨みを同じうし、意に遅遅たること有り。暫く相い見んと欲す。属託する所有り。今 車を遣りて往かしむ。必ず自ら力めんことを想う。

志を養う、とは『莊子』讓王篇に「志を養う者は形を忘る」とあるのにもとづき、高尚な目的へ向かって自己の精神を高め、俗世の榮達には背を向け

ることである。秦嘉は、役人勤めの身として、その志向を保ち続けることがどうしてもできなくなり、俗世に随い時運に逆らわず、出発せねばならなくなったというのである。そして、妻の病が癒えぬのが心配でたまらないと、なぐさめる。

本心では行きたくもないのに、行かねばならないと繰り返し、病に苦しむ妻に、自分も苦しいのだと言う。そして、行って帰ってくるのには時間がかかるだろうから、最後に出発前にことづけておきたいことがあるので、車をよこすから、何とかしてやってきて欲しいと言うのである。

このことづけておきたいことがあるということ、これがこの書信の実際的な用向きであろうが、仕事と家庭の二者選択になやんだあげく、仕事と出世を取らざるを得なかったであろう男のいいわけがましさが感じとれる。

これに徐淑が答える。

「知屈珪璋、應奉藏使。策名王府、觀國之光。雖失高素皓然之業、亦是仲尼執鞭之操也。自初承問、心願東還、迫疾惟宜抱歎而已。日月已盡。行有伴例。想嚴莊已辦、發邁在近。誰謂宋遠。企予望之。室邇人遐。我勞如何。深谷逶迤、而君是涉。高山巖巖、而君是越。斯亦難矣。長路悠悠、而君是踐、冰霜慘烈、而君是履。身非形影、何得動而輒俱。體非比目、何得同而不離。於是詠萱草之喻、以消兩家之恩。割今者之恨、以待將來之歡。今適樂土、優游京邑、觀王都之壯麗、察天下之珍妙、得無目玩意移、往而不能出邪」。珪璋に屈し、歳使に應奉するを知る。名を王府に策し、国の光を觀る。高素皓然の業を失うと雖も、亦た仲尼執鞭の操なり。初めて承問ありしより、心に東還を願うも、迫疾ありて惟だ宜く歎を抱くべきのみ。日月已に尽く。行に伴例有り。嚴莊の已に辨い、發邁の近きに在るを想う。誰か宋遠しと謂う。企ちて予之を望む。室邇くして人遐し。我が勞如何。深谷逶迤たり、而して君 是を涉る。高山巖巖たり、而して君 是を越ゆ。斯れも亦た難し。長路悠悠たり、而して君 是を踐む。冰霜慘烈たり、而して君 是を履む。身は形影に非ざれば、何ぞ動きて輒ち俱にするを得んや。体は比目に非ざれば、何ぞ同にして離れざるを得んや。是に於て萱草の喻を詠じ、以て兩家の恩を

消さん。今の怨みを割ち、以て将来の歎を待たん。今楽土に適けば、京邑に優游たりて、王都の壯麗を觀、天下の珍妙を察、目に玩でて意移り、往きて出づる能わざる無きを得んや。

歳使とは、上計のことであろう。拔擢されて、出世のきっかけをつかんだ夫は、その高い志を捨て去ってしまおうとしているけれども、それも孔子様が「御者になれもする」とおっしゃったのと同じような行いでしょうか。仲尼執鞭は『論語』述而篇に出、もし裕福になることが肯定されることなら、たとえ御者というしごとでもやってやろう、と孔子が言ったことにもとづく。

夫の言い訳がましさに對して、出世のために喜んで行こうとしているのでしようと揶揄しているのが読みとれる。孔子はけっして実際にその志を曲げたのではなかった。本当に「養志忘形」を念うようなら、「珪璋（玉器、役人の象徴）に屈し」たりすることはない、というのである。

ただ、手紙は後半自分が病ゆえに夫のもとへ帰れぬ嘆きを語るころから、揶揄の語気が失われ、夫の旅の辛さを思いやり、自分の辛い心情を率直に語り始める。『詩經』からの引用⁶⁾、「形影」「比目」といった常套的な比喩、そして対句表現によって、遠くへ旅立ってゆく夫への気持ちがたたまかけるように述べられる。衛風「伯兮」の詩人が出征兵士の夫を送り出すにあたって、忘れ草を手に入れたいとうたった詩を吟じて、わたしたち「両家の恩」を忘れ去り、今の恨みを断ち切って、再び会う日の歓びを待つこととしましょう、という言葉は、徐淑なりの逆説的な物言いであり、対処しがたい悲しみの前で、実際には「両家の恩」も消し去ることはできず、「今の恨み」も思い切ることはできないことを訴えている。なお、「両家の恩」については、後に触れる。

しかし、徐淑の辛さとは裏腹に、秦嘉は都へ行ってしまえば残してきた妻のことも忘れて、そしてやがては帰ることさえも忘れてしまうやもしれない。この繰り返いは、別れてゆくふたりの、輝かしい未来へと旅立つ者と病に沈んで取り残されてゆく者との悲しみの在りようの差に由来するものかもし

れない。擲揄にせよ、そうでないにせよ、徐淑がここで夫に訴えているのは、夫の出世欲を戒めることなどではなく、取り残される者の不安なのである。

しかし、徐淑は秦嘉のもとへ駆けつけることはできなかった。秦嘉は再び妻に書信を送る。

「車還空反。甚失所望。兼敘遠別、恨恨之情、顧有恨然。間得此鏡。既明且好。形觀文彩、世所希有。意甚愛之。故以相與。并寶釵一雙、好香四種、素琴一張、常所自彈也。明鏡可以鑿形、寶釵可以耀首、芳香可以馥身、素琴可以娛耳」。車還るに空しく反る。甚だ望む所を失う。兼ねて遠別を叙するに、恨恨たるの情、顧だ恨然たる有り。間ろ此の鏡を得たり。既に明らかにして且つ好し。形觀文彩、世に希に有る所なり。意甚だ之を愛す。故に以て相い与う。并せて宝釵一雙、好香四種、素琴一張、常に自ら弾ずる所なり。明鏡は以て形を鑿るべく、宝釵は以て首を耀かすべく、芳香は以て身を馥らすべく、素琴は以て耳を娛しめしむべし。

迎えにやった車に妻の姿はなく、とても失望した。受け取った妻からの書信にしたためられていたのは、ただ恨みごとであった。徐淑の悲しみと不安の訴えは、完全に夫の胸に届いたとは言えないようだ。

別れに際して妻へ贈る品品について述べて、書信は終わる。最初の書信で触れていた、妻にことづきたいものとは、このことであろう。

これに再び徐淑が答える。

「既惠音令、兼賜諸物。厚顧慇懃、出於非望。鏡有文彩之麗、釵有殊異之觀、芳香既珍、素琴益好。惠異物於鄙陋、割所珍以相賜。非豐恩之厚、孰肯若斯。覽鏡執釵、情想髣髴。操琴詠詩、思心成結。敕以芳香馥身、喻以明鏡鑿形。此言過矣。未獲我心也。昔詩人有飛蓬之感、班婕妤有誰榮之歎。素琴之作、當須君歸、明鏡之鑿、當待君還。未奉光儀、則寶釵不列也。未侍幃帳、則芳香不發也」。既に音令を恵まれ、兼ねて諸物を賜る。厚顧慇懃、非望に出づ。鏡に文彩の麗有り、釵に殊異の觀有り、芳香既に珍らかにして、素琴益ます好し。異物を鄙陋に恵み、珍ずる所を割きて以て相い賜う。豊恩

の厚きに非ざれば、孰か肯えて斯の若くせん。鏡を覽て釵を執れば、情想髣弗たり。琴を操りて詩を詠ずれば、思心は結ばれを成す。勅するに芳香もて身を馥らするを以てし、諭すに明鏡もて形を覽るを以てす。此の言過てり。未だ我が心を獲ざるなり。昔 詩人に飛蓬の感有り、班婕妤に誰栄の歎有り。素琴の作、当に君の帰るを須つべく、明鏡の鑒、当に君の還るを待つべし。未だ光儀を奉ぜざれば、則ち宝釵列せられざるなり。未だ帷帳に侍せざれば、則ち芳香発せられざるなり。

書信を下さった上に、素晴らしい品々まで頂いたが、まったく望んでもいなかったことでした。自分のことを思ってくださっているからこそ、こうして下さったのだと思うと、贈られた品を手にして、あなたの思いに胸が塞がります、と徐淑はまず述べる。

しかし、衛風「伯兮」の詩人が、夫が居ない時は妻は蓬髮にしているものだろうと、班婕妤が、君主の愛情がなくなれば粧いなどする必要はないといった気持ち⁷⁾、まさにそのような気持ちで私がいることを夫は理解してくれてはいない、と徐淑は訴えている。

夫からの贈り物は勿論嬉しいものではあったが、徐淑にとって、その贈られた品々も、夫がそばに居てこそ役に立つものなのであった。彼女は、あくまで夫との離別の悲しみを訴え続けている。

さて、以上で二人が別れに当たって取り交わしたとされる書信をひととおり読み終えたが、まず強く感じられるのは、秦嘉の手紙が簡略でそっけないものであるのに比べて、徐淑の手紙は修辞に富み、感情に富んでいることであろう。まさしく、『芸文類聚』がこの書信を「閨情」の部に収める所以である。

この書信は、『玉台新詠』の「かれの妻の徐淑は病気で実家に帰っており、そのため、会って別れを告げることができなかった」という記述を裏付け、読者には徐淑の「閨情」を強く感じさせるものであった。

二

次に、その詩を読むこととしよう。

まず、秦嘉の「婦に贈る詩」三首の第一首を、三節に分けて見てみよう。

- | | | |
|---|-------|-----------|
| 1 | 人生譬朝露 | 人生朝露の譬し |
| | 居世多屯蹇 | 居生屯蹇多し |
| | 憂艱常早至 | 憂艱は常に早く至り |
| | 歡會常苦晚 | 歡会は常に苦だ晩し |

詩は、樂府古辞や古詩によく見られる表現によって、人生短促の憂いを表明して始まる。「歡会」とは、妻徐淑と良き時間を共有することを言う。ただでさえ短い人生なのに、そこから多くの時間を奪い去ってゆく辛く苦しいこと、その訪れはいつもきまって早いものだ。なのに、それに対して、良き時間はいつも遅くやってくる。世の中とはそういうもの。

曹植が「歡会再び遇い難く、蘭芝重ねて栄えず」とうたったように、一度失われた良き時間は、再び巡ってはこない。それだけに、ふたりが短い間だけだったとはいえ、共にできた歡会が惜しまれるのである。このように、妻との時間を恋い慕う気持ちは、秦嘉の書信には、見られなかった。

- | | | |
|----|-------|----------------------|
| 5 | 念當奉時役 | 時役に奉ずるに当たり |
| | 去爾日遙遠 | 爾を去ること日に遙遠なるを念う |
| | 遣車迎子還 | 車を遣りて子の還るを迎えしめんとすれども |
| | 空往復空返 | 空く往きて復た空く返る |
| | 省書情悽愴 | 書を省るに情悽愴たり |
| 10 | 臨食不能飯 | 食に臨んで飯う能わず |

ここでは、秦嘉の二通の書信に書かれていた事がうたわれる。書信にあって、ここにはないのは、贈り物のことである。

さて、ここに現れている心情は、書信とは、かなり違っている。まず、都へ上ってゆくことが、平生の志とは違っているといった言い訳がましいことはまったくない。

その一方、食事も喉を通らぬほど辛いという心情は、書信には強く現れていなかった。「情悽愴たり」、悽愴とは、『詩品』の李陵評に現れていたことばで、同じく『詩品』の秦嘉・徐淑評の「悽怨」という言葉（後述）と関連があると思われるものである⁸⁾。この辛く悲しい感情は、秦嘉が徐淑の書信から読みとった感情であると同時に、妻の書信に触れて、秦嘉の心の中に興った感情でもあるだろう。書信を読む限り、徐淑の心情は、秦嘉の心に響き合うことができなかつたように感じられたが、詩においては、単に詩的表現のためであるだけでは片づけられない、辛さと悲しさの表白がなされ、秦嘉の心の中に徐淑の思いが響きわたっているのを知ることができる。

- | | |
|----------|----------------|
| 11 獨坐空房中 | 独り坐す空房の中 |
| 誰與相勸勉 | 誰か与に相い勸勉せん |
| 長夜不能眠 | 長き夜は眠る能わず |
| 伏枕獨展轉 | 枕に伏して独り展転す |
| 15 憂來如尋環 | 憂いの来たるは尋環するが如く |
| 匪席不可卷 | 席に匪ざれば卷くべからず |

妻の居ない閨房にいて、妻無くしては、たがいに励まし合うものなどいないことを悲しむ。13・14句、常套表現によって、眠りにつけぬほどの憂いに襲われていることをうたう。そして、その憂いは、かれの心の中でぐるぐると回り続けてやむことがない。しかし、憂いはむしろのように巻取って、どこかにしまいこんでしまうこともできないのだ。榔風「柏舟」の句を、ここでは原文と全く異なった意味に用いており、ユニークである。と同時に、

このような表現にも、書信には見られなかった感情が投影されているように感じられる。

続いて、秦嘉の第二首を三節に分けて読む。

- | | | |
|---|-------|---------------|
| 1 | 皇靈無私親 | 皇靈に私親無く |
| | 爲善荷天祿 | 善を為せば天祿を荷う |
| | 傷我與爾身 | 我と爾と |
| | 少小罹榮獨 | 少小にして榮獨に罹るを傷む |
| 5 | 既得結大義 | 既に大義を結ぶを得れども |
| | 歡樂若不足 | 歡樂 足らざるが若し |

天帝はひいきすることがなく、良い行いをすれば天の恵みが受けられるはずだ。にもかかわらず、我々夫婦は、こんなに若くして離ればなれとなり、孤独の身となってしまわねばならない。結婚したとはいっても、幸福な時間はまだまだ十分ではないのに。

ここでうたわれる内容は、第一首の第一節と同じである。ただ、ここでは、秦嘉は二人が離ればなれになることを、不可解な天のしうちと見立てて、天に怨みを述べている。

榮獨は、後述する『通典』の于氏の表にも「妾 命を受くること不天たりて、此の榮獨に嬰る」とあり、ここの表現との関連が伺われる。また、「大義を結ぶ」とは、『易』の家人の象伝の「女は位を内に正し、男は位を外に正す。男女の正しきは、天地の大義なり」を踏まえ、婚姻することを言う。なお、後に触れる「古詩 焦仲卿の為に作る」（『玉台新詠』巻一）にもこの言葉が見える。

- | | | |
|---|-------|-----------------------------|
| 7 | 念當遠離別 | 当に遠く離別すべきを念えば |
| | 思念敍款曲 | 思念す 款曲を敍せんことを ⁹⁾ |
| | 河廣無舟梁 | 河広くして舟梁無く |

- 10 道遠隔邱陸 道遠くして邱陸に隔てらる¹⁰⁾
 臨路懷惆悵 路に臨みて惆悵たり
 中駕正躑躅 中駕して正に躑躅す
 浮雲起高山 浮雲 高山に起ち
 悲風激深谷 悲風 深谷に激す
- 15 良馬不回鞍 良馬 鞍を回らさず
 輕車不轉轂 輕車 轂を転ぜず

今や妻のもとから遠く離れていこうとしている。その前に自分の気持ちの隅々まで話しておきたい。こうして、秦嘉の叙別の情がうたいおこされる。旅路の情景を想像しつつ、常套表現によって、道程の遥かさ、たちもとのおる気持ち、悲愴な風景、自分の力ではどうしようもない、逆らえない運命の力をたたみかけて表現する。

さて、第一首でうたわれていた「去爾日遙遠」が、第二首のここにおいて焦点が当てられ、詩は又一步別れへ向かって緊迫感を高めた。しかし、書信においては、この遠行を想像していたのは徐淑の方であり、彼女は自分が「比目」や「形影」のたとえのように夫から離れずについてゆけないことの悲しみを綿々と述べていた。

- 17 針藥可屢進 針藥は屢しば進むべきも
 愁思難爲數 愁思は為め難きこと数しばなり
 貞士篤終始 貞士は終始に篤きも
- 20 恩義不可屬 恩義は属すべからず

病に臥す妻よ、針や薬は頻繁に用いるがよい。しかし、心のなかにある愁いというものは、癒しがたいものだ。「愁思は為め難きこと数しばなり」、この言葉は、病気の妻にこれからさらに加わる愁いを思いやる言葉であるかもしれないが、それ以上に、病気の身ではないとはいえ、妻との別れに愁いを

抱く自分の辛さも、病気の苦しみ以上なのだと訴えかけているのであろう。

さて、「貞士」たる自分は、終始一貫して篤実、妻に対する誠意は変わるべくもない。それゆえ、妻と別れる愁いはおさめるすべもない。しかし、だからといって、妻に対して「恩義」を言いつけることはできない、という言葉で詩は締めくくられる。

この最後の一句は、従来解釈が定まらないところである¹¹⁾。本稿は、この一句を、秦嘉の徐淑にたいする思いやりの言葉と考え、貞士たる自分の気持ちは変わらないが、妻に「恩義」—すなわち夫婦にある封建的・倫理的な側面から縛り付ける紐帯—をいいつけ、妻にまで篤実さを要求はしない、すなわち、自分の身に万が一のことがあったなら、秦家を離れて再婚しなさい、と言っているのだ、と取りたい。このことについては、後述する。

さて、第三首を二節に分けて読む。

- | | | |
|---|-------|-------------|
| 1 | 肅肅僕夫征 | 肅肅として僕夫征き |
| | 鏘鏘揚和鈴 | 鏘鏘として和鈴揚ぐ |
| | 清晨當引邁 | 清晨当に引邁し |
| | 束帶待雞鳴 | 束帯して雞鳴を待つべし |
| 5 | 顧看空室中 | 顧り見る空室の中 |
| | 髣髴想姿形 | 髣髴として姿形を想う |
| | 一別懷萬恨 | 一別 万恨を懷き |
| | 起坐爲不寧 | 起坐 為に寧らかならず |

別れの時はいよいよ迫った。出発の朝、妻の居ない部屋にいて、妻の面影を思い浮かべ、胸の内は恨みで満たされ、立ち居振る舞いも落ちつかない。

第一首・第二首同様、別れが近づいて、妻との結婚生活への愛惜の情がうたわれる。

- | | | |
|---|-------|-----------|
| 9 | 何用敍我心 | 何を用て我心を敍し |
|---|-------|-----------|

遺思致款誠	遺思 款誠を致さん
寶釵可耀首	宝釵は首を耀かすべく
明鏡可鑿形	明鏡は形を鑿るべし
芳香去垢穢	芳香は垢穢を去り
素琴有清聲	素琴に清声有り
15 詩人感木瓜	詩人 木瓜に感じ
乃欲答瑤瓊	乃ち瑤瓊を答えんと欲す
愧彼贈我厚	彼の我に贈ること厚きに愧じ
慚此往物輕	此の往物の輕きを慚ず
雖知未足報	未だ報ゆるに足らざるを知ると雖も
20 貴用敍我情	用て我が情を敍するを貴ぶ

別れにあたって、贈り物に託して自分の気持ちを伝えたい。

この事は、書信にも見えていた。しかし、ここに表現されている心情は、異なっている。書信においては、ただ品々のすばらしさやその効能が語られるのみであったが、ここでは、秦嘉の情が溢れ出ている。

真心を伝えんとして贈る品々ではあるが、それはとても十分に妻に報いることができるものではない。今までに妻がわたしにしてくれたことは、こんな品物とは比較さえできない。衛風「木瓜」の詩人は、木瓜を贈られたことに感動して瓊で報いたいとうたった。だが、妻には、たとえ瓊を贈ってさえもなお足りない。なぜなら、妻がわたしにしてくれたことは、木瓜などでは喩えられないからだ。それでもなお、この品々を贈るのは、これによって自分の心情を伝えることができるのを大事に思うからに他ならない。

それでは、ここで秦嘉が徐淑に伝えようとしている、かれの心情とは具体的にどのようなものなのだろうか。「首を耀かし」、「形を鑿」、「垢穢を去り」、「清声」を聞く、このような品々は、徐淑の書信のなかでは、夫がいない時には不要の物とされていたのであったが。

以上で、秦嘉の詩はひとつおりの読み終えたことになる。次に、これに徐淑

が答えた詩、「答うる詩」を三節に分けて読むこととしよう。

- | | | |
|---|-------|----------|
| 1 | 妾身兮不令 | 妾身令ならず |
| | 嬰疾兮来歸 | 疾に嬰りて来歸す |
| | 沈滯兮家門 | 家門に沈滯し |
| | 歷時兮不差 | 時を歷るも差えず |
| 5 | 曠廢兮侍覲 | 侍覲を曠廢し |
| | 情敬兮有違 | 情敬 違う有り |

病のせいで実家に戻ってきているが、いっこうによくならない。おそばでお仕えることもおこたったまま、あなたへの真心という点でもきちんとできておりません。

徐淑の書信のなかでは、「迫疾ありて惟だ宜く歎を抱くべきのみ」とだけあって、病ゆえに夫のもとへ駆けつけられぬことを嘆いたが、この詩では、自分が病気で夫に仕えられなかったことを嘆いていて、より自責的である。

- | | | |
|----|-------|-------------|
| 7 | 君今兮奉命 | 君は今 命を奉じ |
| | 遠適兮京師 | 遠く京師に適く |
| | 悠悠兮離別 | 悠悠として離別し |
| 10 | 無因兮紓懷 | 因りて懷いを紓する無し |
| | 瞻望兮踊躍 | 瞻望して踊躍し |
| | 佇立兮徘徊 | 佇立して徘徊す |
| | 思君兮感結 | 君を思えば感結ばれ |
| | 夢想兮容輝 | 夢に容輝を想う |
| 15 | 君發兮引邁 | 君發して引邁し |
| | 去我兮日乖 | 我を去りて日に乖る |

夫は命を奉じて都へ上る。遠く離れてゆくというのに、思いを伝えるすべ

もなく、ただ夫が行く方向を眺めて徘徊するだけである。夫を思えば、気持ちには結ばれ、夢の中でも夫の姿が思われる。出発して進んで行けば、日に日にわたしから離れてゆく。

書信では、自分の思いを夫に伝えるすべがないことについては、徐淑は何も触れていなかったが、ここでは、その嘆きが見られる。また、書信では、夫が離れて行く光景が想像されて、くわしく述べられていたが、詩においては、その光景ではなく、夫の行く方を眺め、夫の旅程を思っている自分の姿がうたわれている。

- 17 恨無兮羽翼　　羽翼の
 高飛兮相追　　高く飛んで相い追う無きを恨む
 長吟兮永歎　　長吟して永歎し
- 20 涙下兮霑衣　　涙下りて衣を霑す

書信と同様、夫と離れずにおれないことを恨んでいる。ただ、書信では、都へ行ってしまったら、もう戻ってくる気などなくなってしまうのではないかと、擲揄する詞がつづいており、悲哀に流れたままに終わってしまわないのだが、詩ではただひたすら嘆き悲しんだまま終わっている。

三

以上で、かれらふたりの書信と詩四首を読み終わった。詩の中でも『玉台新詠』の序文や、書信から読みとれる彼等ふたりの別れの筋立てが記されていた。しかし、詩の中に表現された感情は、書信のそれとは異なっていた。

それぞれの詩を読む際に触れたように、書信において表現されなかった感情が詩においてうたわれ、詩でうたわれない感情が書信に表現されており、詩と書信は互いに補い合う関係にあるということになろう。さきに、鈴木虎雄博士が、彼等の詩の理解の手助けとして、書信を利用されたことに触れた

が、さらに早く宋の姚寬もその『西溪叢語』において、かれらの書信と詩を並置してみせおり、詩と書信の両者あい助けあって、ふたりの感情のやりとりが余すところなく読者に伝えられる効果があるようだ。

書信だけを読む限りでは、秦嘉はどちらかという情薄い男とも取れそうである。しかし、彼の詩をひとたび読めば、そこには妻への情愛が充ちあふれている。また、書信を読む限りでは、徐淑は病のために夫のそばにおれなかったことについてはさほど悲しんではおらず、夫が自分を置いて離れてゆくことへの恨みをもっぱら語っているようにも感じられるが、詩の方では、夫に仕えることができないことを謝る気持ちが強く歌われている。また、徐淑が詩の中で夫の遠行の情景を想像するのに対して、秦嘉は詩の中で自分がこれから行く旅程を想像するという、交叉した対応も見られるのである。書信と詩と、その両方を読むことによって、情感が円満に備わった一組の夫婦像が読者のなかに形成されるといってよいだろう。

ここに、推測されるのは、今別々に伝わるこの書信と詩が、並べて読まれ、語られた環境が存在していたであろうということである。そして、その環境が、すなわち、かれらの物語が生命を持っていた場であると考えられる。

物語の中で、詩と書信が並置されている、といえば、われわれは李陵と蘇武の物語を思い浮かべるだろう。李陵と蘇武がやり取りした書信は、『芸文類聚』に記録されている。ただ、これらの書信は正史などの記載には見えず、ただ李陵の書信一通のみが『文選』に取られているだけである。『文選』に取られているとはいえ、六朝人の偽作の可能性はもちろんあるわけであるが、当時の人々にとっては、それなりの実在感が存在していたであろう。

また、詩も、かれらが取り交わしたのだとされるものが多く伝えられているが、その多くは一般的な別れの情を述べた内容のもので、かれらの物語に付会されたものようである。

たとえば遠欽立氏は、蘇武に仮託する作品の登場は、李陵を模擬するものよりもかなり遅れることを指摘するが、李陵・蘇武の物語の中心人物はやは

りなんといっても李陵である。また、その作品集について見てみると、『隋書』経籍志には、李陵の集は記録されるが、蘇武の集は記録されていないのであって、李陵に比べて、蘇武の存在は軽いのである。ただ、別れの物語には相手が必要であり、その相手として格好の存在であった蘇武への注目が、ふたりの物語の成長にもなって大きくなっていったのである。

秦嘉と徐淑の場合はどうであろうか。後述するように、このふたりの物語の主人公は徐淑なのである。そして、徐淑の集は『隋書』経籍志に記録されるが、秦嘉の集は記録されないのであった。こうしてみれば、李陵・蘇武、徐淑・秦嘉にパラレルな関係を見いだせるだろう。

ただ、そうなる疑問に感じるのは、詩の応酬においては、秦嘉が主人公である徐淑をさしおいて、質量ともにすぐれている、という点である。

そもそも秦嘉の詩は、五言詩として完成されたものであるのに対して、徐淑の詩は、「兮」字を全句の3字目に置いたもので、実質的には四言詩といっても差し支えないものである。しかし、一方では、その詩が仮託されたものであるかどうかを考えるとときには、その五言詩としては未完成な有様が、一概には言い切れないけれども、却ってその由来の古さを思わせることにもなり、秦嘉の詩が後人の手になる確率は非常に高いと言えることになるだろう¹²⁾。

逢欽立が搜集した、秦嘉・徐淑の詩を、今比較してみよう。

まず、『初学記』に載せる「婚を述ぶる詩」二首であるが、四言詩である。

羣祥既集	羣祥 既に集い
二族交歡	二族 交歡す
敬茲新姻	茲の新姻の
六禮不愆	六礼愆わざるを敬う
羊雁總備	羊雁 総て備わり
玉帛箋箋	玉帛 箋箋たり

君子將事	君子 事を將うるに
威儀孔閑	威儀 孔だ閑かなり
猗兮猗兮	猗あ 猗あ
穆矣其言	穆たるかな 其の言

紛彼婚姻	紛たるかな 彼の婚姻は
禍福之由	禍福の由るところ
衛女興齊	衛女 齊を興し
褒姒滅周	褒姒 周を滅ぼす
戰戰兢兢	戰戰兢兢として
懼德不仇	徳の仇わざるを懼る
神啓其吉	神 其の吉を啓し
果獲令攸	果して令攸を獲たり
我之愛矣	我 之を愛し
荷天之休	天の休を荷う

新婚をことほぐ歌である。よき妻を得ることの大事さを戒め、そしてよき妻が得られたことを祝している。内容的に、秦嘉・徐淑夫婦の物語との関連性は感じられるが、三首の「婦に贈る詩」とは似ても似つかぬ、堅い調子の言葉がならんでいる。

また、『玉台新詠』巻九「婦に贈る詩」一首、これも四言詩である。

曖曖白日	曖曖たり 白日
引曜西傾	引曜 西に傾く
啾啾鷄雀	啾啾たり 鷄雀
羣飛赴楹	羣飛して楹に赴く
皎皎明月	皎皎たり 明月
煌煌列星	煌煌たり 列星

巖霜悽愴	巖霜 悽愴として
飛雪覆庭	飛雪 庭を覆う
寂寂獨居	寂寂たり 独居
寥寥空室	寥寥たり 空室
飄飄帷帳	飄飄たり 帷帳
熒熒華燭	熒熒たり 華燭
爾不是居	爾 是に居らざれば
帷帳焉施	帷帳 焉ぞ施さん
爾不是照	爾 是に照らされざれば
華燭何爲	華燭 何為れぞ

これもまた、同様に堅い調子である。詩の内容は、悼亡の歌に近いが、病気で実家に帰っている徐淑を思つてのうたであろうか。

特に最後の詩、同じ「婦に贈る詩」でも、『玉台』巻一の三首とはまったく違った感じの詩である。これが同一人物の手になるものなのだろうか。

さて、五言詩は、いくつかの句のみが断片的に残っている。『文選』卷二十三、張載の「七哀詩」李善注に引く一句、

哀人易感傷　　哀人は感傷し易し

また、同卷二十六、陸機「洛に赴く道中の詩」李善注に引く二句、

過辭二親墓	過りて辞す 二親の墓
振策陟長衢	策を振るいて長衢を陟る

同卷二十六、陸機「河陽景の詩」李善注に引く一句、

巖石鬱嗟峨　　巖石 鬱として嗟峨たり

この三例が集められている。

さて、「洛に赴く道中の詩」の中で、李善は、「遺思致款誠」という一句も引いているのであるが、これは『玉台』巻一の三首の中の一句であった。つまり、三首の五言詩以外に、秦嘉の詩とされていた五言詩が、唐にはまだ多く存在していた可能性を示しているだろう。一方、徐淑の詩はというと、『玉台』巻一の一首しか遼欽立は搜集できていない。

徐淑の集が『隋志』に記録され、秦嘉の集が記録されなかったということ、このことは矛盾していないだろうか。矛盾がないとするならば、その間の説明はおそらくこういうことになるだろう。秦嘉や徐淑たち自身が『玉台』巻一の秦嘉の作のような完成された五言詩をやりとりした可能性は極めて少なく、徐淑の集には五言詩は殆ど収められず、秦嘉の作とされる五言詩は、すべて後人の仮託したものであって、秦嘉に仮託された詩が、時代を下るに連れてふえていった。それはつまり、かれらふたりの物語における、ワキである秦嘉の役割と五言詩の比重が時が経つとともに増大していったということである。

ところで、かれらの五言詩に対して、五言詩を専門に評した『詩品』は、どういう評価をあたえていたであろうか。鍾嶸は、彼ら夫婦を中品の最初に置き、その五言詩について、こう述べている。

「漢上計秦嘉、嘉妻徐淑 夫妻事既可傷、文亦悽怨。爲五言者不過數家、而婦人居二。徐淑敘別之作、亞於團扇矣」。漢の上計秦嘉・嘉の妻徐淑 夫婦の事跡が傷ましい上に、その詩句も悽怨である。五言詩を作ったものが数えるほどしかないにもかかわらず、その中に婦人がふたりも座を占めている。徐淑の「敘別」の作は、班婕妤の「團扇」の作につぐものである。

『詩品』は、上品の最初に古詩を置き、次いで李陵、そして班婕妤を並べるが、五言詩の濫觴として、秦嘉・徐淑の詩を評価していることが知られる。そして、李陵も班婕妤も秦嘉・徐淑も、いずれもがその詩の背景に「事」、つまり物語を持っていたことも興味深い共通点である。鍾嶸は李陵を評して、「文に悽愴多く、怨む者の流なり」と流別づけた評を記すが、これ

ら「事」を背景とした作者たちの五言詩はいずれもが「怨者流」に属するものでもあった。

五言詩を歴史的に系統立てようとする鍾嶸は、徐淑の五言詩を、班婕妤の作に次ぐものと評している。「团扇」の作とは、おそらく『文選』巻二十七に載せる「怨歌行」のことであろう。鍾嶸は、序文においては、五言詩の作者は、李陵から班婕妤までおよそ百年の間に婦人はひとりいるだけだと述べており、女性作家に注目しているのがわかるが、徐淑への注目は、女性作家ということのみによるものであって、その作品の質によるものではなさそうである。

とにかく、鍾嶸も、かれら夫婦ふたりを評価しているのだから、秦嘉の作品も評価の対象になっていることは間違いないだろうが、それがどのような作品であったのかは、今となってはわからない。おそらく、鍾嶸は、『玉台』の三首を含んだ、より多くの秦嘉に仮託された作品を見ることができたに違いあるまい。

四

秦嘉・徐淑の物語が発展してゆくにつれて、秦嘉の役割が増し、それにつれて秦嘉に仮託する作品が増えたのではないかと考えたが、それではいったい、かれらの物語の最初の核となったものは何であったのだろうか。そしてまた、『玉台』の贈答詩が交わされた背景となった生別の話は、物語の発展上いかなるところに位置するものなのだろうか。

この問題を考える手始めとして、物語の発展につれて、その役割が増えていったと推測した、秦嘉の詩の中に何か特徴となる鍵がないか探ってみよう。

そういう意味で注目されるのは、第二首の「恩義は属すべからず」という部分である。先にこの詩を読んだとき、わたしは、これが秦嘉の妻を家と家との封建的なつながりに縛り付けたくない気持ちを表現したものであると考

えた。この詩では、6句目に「大義を結ぶ」という表現もあり、一首の基底に家と家とのつながりを背景としての夫婦の生別をうたうことがあると思われるが、この「恩義」という言葉は、当時の夫婦というもののあり方の重要な要素であったようだ。

「大義を結ぶ」という表現について、「古詩 焦仲卿の為に作る」にも同様の表現があることに触れたが、この夫婦の悲劇を物語る詩のなかにも「恩義」という言葉が見えている。そこでは、焦仲卿の母が、離縁の命令に従わない息子に向かって、「吾は既に恩義を失えり、会ず相い従許せず」と言い渡すのであった。ここに見られるように、恩義とはただ単に夫婦の間を結びつけているものではなく、嫁と姑、家と家を結びつける紐帯であるのだ。この恩義ということが、家の結びつきの上に成り立つ夫婦というものにとって、いかに大事な要素であったかについては、たとえば、班昭の「女誡」を読むと、よく理解できる¹³⁾。

徐淑の手紙や詩には、この「恩義」ということは表だって現れていない。手紙のなかには「両家の恩を消す」という表現があるが、これは「将来の歓を待つ」という表現と対になっていることから考えるかぎり、ふたりの愛情を忘れ去ってしまおう、という内容であろうから、倫理的な意味が必ず含まれているとする必要はないだろう。

さて、秦嘉の詩に現れた、この「恩義」に関わる話が、徐淑について伝えられている。それは、『通典』に記録された、ある訴えの記録の中に残されている。

『通典』卷六十九に、「兄弟の子を養いて、後と為したる後に自ら子を生むの議」という条があり、東晋の成帝の咸和五年、散騎侍郎賀喬という人物の妻である于氏の上表と、それに対する朝廷の博士たちの決議を載せている。

于氏は、この上表の中で、徐淑の物語を引用する。その話とは、「漢代、秦嘉はわかくして亡くなり、かれの妻徐淑は男の子をもらい受けて育てた。徐淑が死んだ後、朝廷の通儒たちはその子の郷邑を移し、徐淑が育てたその子を秦嘉の後とりとして記録して秦氏の祭祀を継がせた」というものであ

る¹⁴⁾。

さて、博士杜瑗は、この上表に対して、「于氏の拠り所には、すべてははっきりとした証拠がある」と述べていることが、まず注意される。東晋のこの時、杜瑗には、于氏が引いた徐淑の話も、確かな事実として捉えられていたことがわかる¹⁵⁾。ただし、丹陽の尹の謨なる人物が、「于氏が述べたことはひじょうに繁雑で、多くの申し立てたことは、すべて礼典の正しい意味たるものではない」と議するのによれば、すべての人々に対してははっきりとした説得力を持つものであったかどうかは疑わしい¹⁶⁾。

ただ、于氏が説得力あるものと思い、そして申し立ての根拠の一例に引いた徐淑の話は、博士の中にも説得されるものが出ることからわかるように、当時のかなりの範囲の人々に信じられていたものようである。

『通典』を信頼する限り、この東晋の記録が徐淑の「恩義」譚のもっとも古いものになる。徐淑は、夫の死後も、夫の家の存続のために努力したのであり、これはまことに恩義の上で表彰されるべきであったといえるだろう。ただ、この時点では、養子を取って、家の後が絶えぬようにしたことだけが見えている。

次に、劉知幾の『史通』が徐淑を取り上げている。

『史通』人物篇では、范曄の『後漢書』列女伝が、蔡琰を取り上げながら、徐淑を取り上げないことを責め、この両者の長短を対比している。今、その対比がわかりやすいように、原文に段差をつけて引用してみよう。

觀東漢一代賢明婦人、

如秦嘉妻徐氏、動合禮儀、言成規矩、毀形不嫁、哀慟傷生、此則才德兼美者也。

董氏妻蔡氏、載誕胡子、受辱虜廷、文詞有餘、節概不足、則言行相乖者也。

至蔚宗『後漢』傳標列女、徐淑不齒、而蔡琰見書、欲使彤管所載、將安準的。

(東漢一代の賢明婦人を觀るに、秦嘉の妻徐氏の如きは、動は礼に合

い、言は規矩を成し、毀形して嫁がず、哀慟生を傷る、此は則ち才徳兼美なる者なり。董氏の妻蔡氏は、載ち胡子を誕み、辱を虜廷に受け、文詞に余り有るも、節概足らざれば、則ち言行相い乖く者なり。蔚宗『後漢』伝に列女を標するに、徐淑齒せずして、蔡琰書に見ゆるに至りては、彤管をして載する所たらしめんと欲すれども、將た安ぞ準のたらん)

范曄が列女と標題された伝を創始しながら、そこに才徳兼美たる徐淑がとりあげられなかったことには、劉知幾にははかり知れない理由があったかもしれない。劉知幾が史実として認めていたことが、范曄にとっては史書に載せるに値せぬ話であったということも考えられるし、そもそも范曄は劉知幾が知っていたような秦嘉・徐淑の物語を知らなかったことさえあり得る。

范曄が如何なる理由で徐淑を取り上げなかったのかについて考える材料はないが、明らかなのは、劉知幾が、『後漢書』という史書に載せられた蔡琰の話と同レベルに扱うほど、徐淑の話に歴史的な信用をおいていたということである。

それでは、劉知幾が念頭に置いていた徐淑の話とはどのようなものであったのだろうか。これについては、ここにあげた『史通』の文章から探る以外に手がかりはない。

劉知幾は言う、徐淑は「毀形」し、嫁がず、その悲しみに慟哭するさまは彼女の生命を縮めんばかりであった、と。蔡氏が異民族との間に子をもうけたことと対比されていることを考えると、これは、徐淑が夫秦嘉の死後、再び嫁ぐことなく、非常に悲しんだことを述べているに間違いはない。そして、彼女は再嫁せぬために、「毀形」しなければならなかったのである。

例えば、劉向『列女伝』巻四の貞順に見える女性達や、『後漢書』列女伝の寡婦高行や沛の劉長卿の妻などに見られるこの「毀形」という行動は、自らの髪を剪り、鼻をそぎ、耳を切り落としたりして、実家からの再嫁の強要を拒むものであるが、徐淑にもこのような話が存在していたことになる¹⁷⁾。

劉知幾が、このような貞女徐淑の話の念頭において述べているかぎり、彼

が評価する徐淑の「言動」も、おそらくは、「毀形」し再嫁を拒む徐淑の言動を主に指しているのだと考えるのが素直であろう。しかし、いったい唐代の劉知幾が言う「礼儀」と「規矩」は、そのまま漢代にあてはめて考えることができたであろうか。そもそも『後漢書』の作者范曄にしても、この再嫁ということについて、劉知幾と同じ倫理観を持っていたかどうかすら疑わしいのではないのか。楊樹達の『漢代婚喪礼俗考』¹⁸⁾がまとめて示しているように、漢代にあては、夫と別れた後再婚することは、さほど倫理的に非難を受けるものではなかったのである。

ここに、漢代以後、劉知幾の時代にいたるまで、再婚を禁ずるような女性に対する倫理的な圧迫が増大した流れを見ることができるようと思われる¹⁹⁾。徐淑の話にしても、『通典』の話からふくらんで、「毀形」し、「哀慟傷生」する話にまで発展していったのではなからうか。お手本として選ばれた前代の物語に、新たに強くなってきた倫理的価値がどんどんつけ加えられていったのではないか。

この意味で、「古詩 焦仲卿の為に作る」も、建安という時代を背景とした物語をうたっているけれども、「恩義」が引きおこした夫婦の悲劇をうたうことから、その成立はかなり時代が下るように思われる。

さて、徐淑については、さらにこのような話が『幽明録』に見える。

「隴西秦嘉、字士會、雋秀之士、婦曰徐淑、亦以才美流譽、桓帝時、嘉爲曹掾、赴洛、淑歸寧于家、晝臥、流涕覆面、嫂怪問之云、適見嘉、自說往律鄉亭、病亡、二客俱留、一客守喪、一客賚書還、日中當至、舉家大驚、有頃書至、事事如夢」。隴西の秦嘉、字は子會は、すぐれた人物であった。妻は徐淑といい、彼女もまた才と美貌で誉れ高かった。桓帝の時、秦嘉は曹掾となって洛陽に赴いた。徐淑は実家に帰っていたのだが、彼女は昼寝をして、涙が顔を覆わんばかりに泣き出した。兄嫁が尋ねると、夢のなかで秦嘉に会い、秦嘉が語るには、自分は律郷亭に行き、そこで死んだ。旅人二人が一緒に泊まっていたが、一人が、わがなきがらを見守り、もう一人が書信を携えて昼頃おまえのもとにやって来るだろう、というのだ。これを聞いて家の

者たちは皆驚いたが、しばらくすると書信が到着し、すべて夢の通りであった。

夢に亡くなった夫が現れて、妻に自分の死を告げるという怪異が、この話が志怪小説に記録された理由であるが、かれらには、その生別と死別を実に劇的に結ぶ物語も存在していたようだ。かれらの生別がそのまま死別へと直接連続するというさらなるドラマ化も施されていたらしい。

『幽明録』自体は、信用が置けないかもしれないが、このような秦嘉と徐淑の物語が存在していたことは、『後魏書』卷二列女伝の、勃海の封卓の妻の話からも確認できる。封卓は結婚後都へ役人として上り、事に坐して処刑された。妻の劉氏は家にいたが、夫が死んでしまったことを夢に知り、悲しんで泣き止まず、一句を経て死の知らせが到着すると、憤歎して死んでしまった。時の人々は、彼女を秦嘉の妻になぞらえた、というものである²⁰⁾。

ここに、都へ上った夫が、当地で死亡した後、残された妻の夢の中に現れて自分の死を告げるという話が、秦嘉・徐淑にまつわって語られていたことがわかる。それにしても、封卓の妻が徐淑になぞらえられたのは、夫の死を夢に知ったという、そのことがらの一致だけによるのだろうか。死んだ夫と夢の中で感応できたということに、当時の人々は、その夫婦のあり方、いや、もっとはっきり言えば、その妻としてのあり方に何らかの賛嘆すべきことがらを認めたのではないだろうか。

『後魏書』の封卓の妻の伝には、中書令の高允なる人物が、彼女の「義」が高いにもかかわらず、その名が世にあきらかではないことを思って製作した詩を附載している。『後魏書』列女伝（テキスト上の問題が存在してはいるが）をあわせ見ても、夫との夢の中での感応と、この妻としての「高義」とが、深い関連を持つものらしいことがわかる。徐淑の感応譚も、当時は、妻としての倫理的な美德をあらわすエピソードとして受け取られていたであろう。

五

以上で、秦嘉と徐淑の物語、いや、よりはっきり言うなら、徐淑の物語の、私が見つかることのできた資料をすべて見終わったことになる。わずかな資料なので、結果的に、その物語のそもそもの核であった部分は何であったのかは、明瞭にすることはできなかった。

もう一度、資料とその年代について整理してみると、資料として最も古いものは、『幽明録』ということになるが、少々信用がおけない。次に古いのは、『後魏書』と『玉台新詠』であるが、南北地を違えこそすれ、時はほぼ同じくして成った。『後魏書』には『幽明録』の話が確認できる資料があったので、『玉台』の編纂時には、生別譚、感応譚ともに知られていたであろうことはわかる。

その後、唐に入って、『史通』の記事があり、「哀慟傷生」の記事が見られた。また、かれらの書信は、『芸文類聚』に収められる。そして、もっとも遅いのが、『通典』である。ただ、そこに引かれる資料は、以上のもののいずれよりも古い。そこでは、徐淑が養子をとって秦嘉の家を継がせたことが語られていた。また『隋書』経籍志もこの時代に著された。

これらわずかばかりの資料から、多くのことは断定できない。しかし、だいたい、上にまとめた時間の関係から、このように推測することは許されるだろう。

まず、『玉台』編纂時には、秦嘉・徐淑の物語は、「哀慟傷生」という話以外の、本論で見てきたすべての筋書きを持っていたのは確実である。当時の人々はその詩を読む際には、ただ単にその直接的背景である生別譚のみならず、死別譚も感応譚も知っていた。物語は成熟して、文字として記録されることもこの頃に最も盛んであったと思われる。

そして、その物語の核は、「恩義」の婦、徐淑であった。東晋においては、夫の家を絶やさぬよう、養子をとったことしか今に伝わる記録がない

が、劉知幾になると、哀しみのあまり命を削るところにまで話が發展している。『通典』によれば、徐淑の死後、朝廷の学者たちがわざわざ彼女が養子として育てていた子供を呼び戻させてまでして、秦嘉の家を継がせているので、徐淑の死のいきさつには、並々ならぬ事情があったように思われる。ひょっとすると、そこに已に「哀慟傷生」の話が存在していたかもしれないが、確かではない。こうして、すべての資料を貫いて、高義の婦、徐淑の話が核として存在している。この核の部分を強く語りかけようとして、物語は豊かに成長していったのであろう。こうして起こったドラマ性を高めようとする動きが、秦嘉との生別・死別の話を強調し、ワキの秦嘉をさらに舞台へ引っぱり出すことに繋がったのである。そして秦嘉は、その物語の成長期の、時代を代表する文学形式である五言詩を、彼に仮託される作品の形式として与えられることになったのだ。

さて、だいたい以上のように推測してよいと思うのだが、資料を見ていると、この秦嘉・徐淑の「恩義」の物語が、梁・陳にいたるまでの間、物語としては伝承され、發展し続けていたであろうにもかかわらず、注目されて文献に残されることもなかったのに、『玉台新詠』の頃になると文献に残されることが増えたように見える。それは、梁・陳にいたって成熟した物語が歴史性も帯びはじめたということでもあろうし、記録者である知識階級の者たちに注意されることが多くなったということだろうが、そうなる上で、五言詩という形式が、かれらの物語において有効性を持ち、生き生きとした説得力を物語に加えたであろうことが想像される。しかし、その有効性は、ただ単にそれが物語を育てた時代における最も新鮮な生命力に満ちた形式であったことだけによるのではなかろうと考えるので、このことに触れて、本論を結ぶこととしたい。

蕭滌非は、『漢魏六朝樂府文学史』において、漢代の樂府詩の抒情的な作品のうち、最も注目すべきものは、夫婦の情愛を描写した一連の作品群であると指摘し、このような作品に表現された女性達がおおむね敦厚であって、南朝北朝を問わず、六朝期の樂府詩に表現される女性とは、まったく異なっ

ていると述べた²¹⁾。そして、作品例として、「東門行」、「豔歌何嘗行」、「白頭吟」、「陌上桑」を取り上げて例証している。(この例のうち、「東門行」は句が長短不齊である。その他は、「豔歌何嘗行」以外はいずれも五言詩であり、「豔歌何嘗行」も四言の句を三句含むだけで、だいたい五言詩といってよい作品である。)

さて、これらの樂府詩の個々については、その成立が漢代なのか、それとも漢よりのちなのか見定めがたいこともあるが、樂府詩であるこれらの作品が、庶民に近いところから取材され、作品として定着したことは、ほぼ間違いなからう。つまり、蕭氏が言う、「敦厚な女性」とは、庶民、もしくは士大夫であっても下級官吏層の女性、則ち匹夫匹婦といわれるところの匹婦なのであった。つまり、秦嘉に仮託された詩の源となった民間の詩歌は、素朴な匹夫匹婦、夫婦の情愛をうたうものであった。そして、そこでは夫婦が生き別れて行く情景が、素材としてよく取り上げられていたのだ²²⁾。

一方、宮体詩の源となる南朝の民歌は、同じく素朴な民間の男女の愛情にかかわって歌われるが、そこで歌われるのは、夫婦という枠に閉じこめられない、男女間の感情であった。その多くは恋愛の詩である。だから、そこに取材して発展した梁陳の文人たちの五言詩の世界も恋愛の詩であり、敦厚な女性が現れにくいのも無理のないことであった。

同じ民歌であるとはいっても、素材とする対象の興味が異なり、また、その民歌に食指を動かした文人たちの興味も異なっていたのである。『詩品』は、班婕妤という宮中の女性の作品に、「匹婦の致」を得たと評を与えるが、梁陳という時代の人物である鍾嶸が、詩の表現と、そして表現に結びついている詩の内容に、漢の民歌の匂いをかぎ取った言葉として理解できる。

そもそも宮体詩のような、いわば爛熟した五言詩ではなく、漢代の香りを残した五言詩、そこには、まことに多くの匹婦のおもむきが描かれていたのであった。蕭氏の例と重なるものもあるが、試みにそのいくつかを挙げてみれば、「古詩十九首」のひとつでもある「冉冉孤生竹」や、「白頭吟」、「塘上行」、「豔歌何嘗行」、「陌上桑」、「焦仲卿妻」等が挙げられるだろう。

「陌上桑」と「焦仲卿妻」は、それ自体が物語をうたいあげる一篇であり、秦嘉・徐淑の五言詩とは少々事情が異なるけれども、「白頭吟」を卓文君の作とし、司馬相如・卓文君夫婦の物語と結びつけることなどを考えれば²³⁾、一篇自体が物語を語っていようと、その詩が物語の中に組み込まれていようと、五言詩と物語との結びつきが極めて強かったことは窺える。

ところで、先に「焦仲卿妻」の成立は漢より以降に遅れるであろうと述べたことと連なるが、たとえば「焦仲卿妻」、そして「陌上桑」などは、敦厚な女性が描かれてきたという五言詩の歴史上、たとえ意図的にはなかったにせよ、きわめて巧妙に物語の器として五言詩が選ばれたものではあるまいか。いずれの作品も、単に夫婦の情愛ということを超えて、きわめて道義的なあり方としての夫婦、「恩義」という絆のうえにある夫婦がうたわれているのであって、ただ単に夫婦の情愛を歌っているのではなく、はなはだ教条的な色彩が濃いからだ。

秦嘉・徐淑の物語に、このような漢代の遺風タイプの秦嘉の五言詩が取り込まれたのも、「焦仲卿妻」や「陌上桑」同様に五言詩のこのような装置としての働きのためでもあろう。そして、この働きも一助となって、梁陳の人々に、物語が強い説得力を持ったのではないか。

そして、これらの詩にまつわる物語は、すべてが下級官吏層の夫婦であり、その道徳なのであった。ただ、「陌上桑」では、そこに登場する「使君」という、より上位の層との道徳観の対立が描かれ、「使君」は羅敷にやりこめられたのであったが。

それらの物語は、その教条を下級官吏層のものたちだけに訴えようとしていたのではないだろう。「使君」がやりこめられることにも現れているように、その対象はひろく士大夫層全体であったはずだ。それゆえにまた、物語は、知識人たちによって記録され、今に伝えられることにもなったのである。下級官吏たちが物語の主人公として選ばれたのは、民間から掬い挙げられた詩や物語によって士大夫の物語が生み出されるときに、士大夫と民間の接点として存在していた下級官吏たちがまず詩や物語を民間から吸収し、後

に知識人たちがさらに下級官吏たちが吸収していた物語の世界を利用したためではなかろうか²⁴⁾。

ともかく、秦嘉と徐淑の物語が教えようとしていたのは、「恩義」であり、そこに現れているのは、「恩義」という倫理観によって妻が夫家に縛られることによって、夫家が存続されてゆかねばならない、という時代の要請であったといつて間違いない²⁵⁾。民間の文学のエネルギーを吸収して形成されてきた下級官吏層の物語世界のなかで、伝承され、発展していったかれらについての物語は、やがて知識人層に注目され、記録された。そこでは、五言詩という形式もひとつの装置として、物語を盛り立て、倫理的な手本としてもうまく機能させるようはたらいていたのだ。

ただ、このように文学の形式があまりにも一時代の倫理観と時代の要請に結びつきすぎたため、唐以降、士大夫・庶民の様相が変化することによる倫理的な規範の欲求のありかたが変化し、秦嘉・徐淑の物語も急速に忘れ去られていったのではあるまいか。勿論、同時に物語の装置としては新たな形式が生み出され、人々が詩に求めるものも変化していったのである。

注

- 1) 本稿は、拙稿「ふうふのうた—六朝における」（『興膳教授退官記念中国文学論集』）で取り上げた夫婦のうち、秦嘉・徐淑についての論考である。なお、テキストとして、『玉台新詠箋注』（中華書局、1985）を用いた。
- 2) 鈴木修次『漢魏詩の研究』第三章第二項一（イ）四八一ページ参照。
- 3) 『鉄橋漫稿』巻七。
- 4) 小川環樹『中国小説史の研究』序文に見える。
- 5) 「計、宋刻作掾、『西溪叢語』引此文、註掾一作計。案漢法歲終、郡國各遣史上計。鄭元（玄）註『周禮』歲終則令羣吏致事句、謂若今上計、是也。其所遣之吏、亦謂之上計。『後漢書』趙壹傳、光和元年舉郡上計。『晉書』宣帝紀、建安六年郡舉上計掾、是也。鍾嶸『詩品』、直題漢上計秦嘉、嘉及其妻往來書、亦並稱爲郡詣京師、則作計爲是、宋刻誤也。馮氏『詩紀』、又因漢有上郡、遂倒其文爲上郡掾、更誤中之誤矣。」
- 6) 「誰謂宋遠、企予望之」は衛風「河廣」、「室邇人遐」は鄭風「東門之藪」、「我勞如何」は小雅「緜蠻」の句。

- 7) 「自悼賦」の句。
- 8) 「文多悽愴、怨者之流。」(上品・李陵評)
- 9) 「思念」、『文選』卷二十五、謝靈運「從弟惠連に酬いる」詩の李善注は「思面」につくる。逯欽立は「思面」とするを勝るとするが、今は『玉台』に従う。
- 10) 「道遠」、『玉台新詠』は「道近」に作るが、『西溪叢語』卷六が「道遠」に作るのに従った。
- 11) 『玉台新詠考異』に「此句未詳。『詩紀』屬作促、稍爲可通。然未詳所本。」と言い、余冠英『漢魏六朝詩選』は「恩義、猶情誼。不可屬、未詳。疑當作可不屬。屬、同續。這句詩似說恩義豈可不繼續呢。」と言う。また岩波文庫鈴木木沢注は、「恩と義とは属すべからず」と訓読し、「恩愛と義理とは連属させるわけにはゆかぬ(このたび、恩愛の綱はたちきらねばならぬ)」と訳し、注として『礼記』喪服四制の「門内之治、恩掩義、門外之治、義斷恩」という句を引いて、「上計といふ役人となつた以上は公義に従ふべきで夫婦の私愛にばかりかかはることはできぬといふのである」と解説を加える。
- 12) 高木正一訳注『鍾嶸詩品』(東海大学出版会)は、『玉台新詠考異』は、叙別の作が答詩であるとし、「当時固より以って五言詩と爲せり」というが、許文雨氏は『文論講疏』においてこの見解を駁し、「他家の五言、固より未だ此の種有らざるなり」といい、叙別の作を、うでに亡びた徐淑の集が収めていたであろうと想定している。『文選』卷五十五に収める劉峻の「広絶交論」の李善注に、「秦嘉の婦の詩に曰く」として「何用叙我心、惟思致款誠」の二句を引くが、その内容からみて、或いはこれが「叙別」の詩の逸句ではなかったかとも察せられる。」と述べる。鍾嶸が見ていた叙別の詩とは如何なるものか、今となっては未詳であり、許氏のように推測することも可能であろう。

なお、「何用叙我心、惟思致款誠」の句であるが、『文選考異』が既に指摘しているように、秦嘉の第二首の句である。(『玉台』は「遺思」に作る。)また、陸機「洛に赴く道中の詩」李善注は、秦嘉の詩として「遺思致款誠」を引く。
- 13) 『後漢書』卷八十四列女伝に収められる。
- 14) 「漢代秦嘉早亡、其妻徐淑乞子而養之。亡後、子還所生。朝廷通儒移其鄉邑、錄淑所養子、還繼秦氏之祀。」(中華書局、1988による)
- 15) 「博士杜瑗議云、(中略)凡于氏所據、皆有明證、議不可奪。」(前掲書)
- 16) 「丹陽尹臣諛議、按于所陳、雖煩辭博稱、並非禮典正義、(後略)」(前掲書)
- 17) 『太平御覽』卷四一五孝女、卷四三九～四四一貞女にも多くの例が見える。

なお、嚴可均の「後漢秦嘉妻徐淑伝」では、『太平御覧』卷四四一の杜預の『女記』の逸文を引き、その記事を徐淑の事跡として当てている。逸文の主人公である寡婦淑が、はたして徐淑であるかどうかは疑問であるが、寡婦淑の「毀形」譚が、徐淑と結びつけられるのは、理由なきことではない。

- 18) 商務印書館、1933。
- 19) 范曄が列女伝を立て、杜預が『女記』を記すなど、漢より後、倫理的模範たる女性を記録しようとする動きが多くなることもこの推察を裏付けるだろう。『後魏書』列女伝はこう記す。「若乃明識列操、文辨兼該、聲自閨庭、號顯列國、子政集之於前、元凱編之於後、隨時綴錄、代不乏人。今書魏世可知者、爲列女傳」(卷九十二)。ここでは劉向を列女の記録創始者と位置づけている。しかし、劉向と范曄以後では、その記録の目的が異なっている。劉向の『列女伝』は、皇帝を戒めるためのものであり、模範となる女性だけではなく、倫理の賊たる女性をもあわせ収めていた。(「向睹俗彌奢淫、而趙衛之屬起微賤、踰禮制。向以爲王教由内及外、自近者始。故採取詩書所載賢妃貞婦、興國顯家可法則、孽醜亂亡者、序次爲列女傳、凡八篇、以戒天子」『漢書』楚元王伝)一方、范曄は、「詩書之言女德尚矣。若夫賢妃助國君之政、哲婦隆家人之道、高士弘清淳之風、貞女亮明白之節、則其微美未殊也、而世典咸漏焉」とあって、模範となる女性を記録し、顕彰するのに傾く。杜預の『女記』は亡びて伝わらないが、今『太平御覧』に残るものを見ても、范曄と同様の態度であつたらうと想像される。
- 20) 「勃海封卓妻、彭城劉氏女也。成婚一夕、卓官於京師、後以事伏法。劉氏在家、忽然夢想、知卓已死、哀泣不輟。諸嫂喻之、不止、經旬、凶問果至、遂憤歎而死。時人比之秦嘉妻。」
- 21) 「在漢樂府抒情一類中、最可注意者、厥爲描寫夫婦情愛一類作品。南朝清商曲、多男女相悅及女性美之刻畫、漢時則絕少此種。蓋兩漢實爲儒家思想之一尊時期、其男女之間、多能以禮儀爲情感之節文。讀上「君子行」亦可見。故其表現之女性、大率溫厚貞莊、與南朝妖冶嬌羞、北朝之決絕剛絕者、岐然不同。如云「他家但願富貴、賤妾與君共舖糜」(「東門行」)、如云「若生當相見、亡者會黃泉」(「豔歌何嘗行」)、如云「願得一心人、白頭不相離」(「白頭吟」)、「使君自有婦、羅敷自有夫」(「陌上桑」)之類、皆忠孝之至也。故即就此點以觀、「孔雀東南飛」亦決不能作于六朝。無他、風格太不類耳。」(第二編第三章括弧内は筆者による補いである)
- 22) また、このような詩歌の表現方法にも一定のパターンがあつた。このことについては、松家裕子「抒情的五言詩の成立について」(『中国文学報』第四十二冊)を参照されたい。

- 23) 「相如將聘茂陵人女爲妾、卓文君作「白頭吟」以自絶、相如乃止」(『西京雜記』卷三)
- 24) 小南一郎『漢武帝内伝』の成立(『中国の神話と物語り』岩波書店、1984)の次の一節が、この問題を考える上で示唆的であった。氏は魏晋南北朝に盛行した志怪小説の内容となる説話が下級の役人、すなわち小吏たちの間で語られていたものであろうとし、「小吏たちの半官半民的な性格が、民間伝承的な要素の濃い話しを官吏の世界に持ちこみ、その結果、より高位の官人であった知識人たちに記録される機会を得ることになったのである。同じ時代に成立した楽府「孔雀東南飛」も、その主人公は小吏であったとされている。「孔雀東南飛」の内容(中略)と表現のしかたの他に例の少ない特殊性も、恐らく小吏層に属する人々の幻想(すなわち心と社会の接触点に形作られる劇構造)とその表現の独自性にもとづくものと思われる。このような小吏層の伝承が社会的により身份の高い県の令長や太守たちの心をそそるなものを含んでいて、彼らの手を経て文字化され、或いはすでに文字化されていた作品が詩文の総集などに収められることになったのである。」と言う。
- 25) 于氏の上表が、徐淑の話を引きいたのもこのことの現れであろう。
- なお、下見隆雄氏が、劉向『列女伝』貞順篇に繰り返し語られる再婚否定の話について、それが夫への貞節を重視するためだけのみならず、実際には夫の死後の家を存続させる責任が妻にも在ることを説く考え方と関連した倫理的要請であろう、と指摘しているのが参考になる。(『劉向「列女伝」の研究』、東海大学出版会、1989。510 ページ)